

考古学特殊研究 国分寺瓦の研究（12） 奈良時代における伊勢・伊賀・志摩の官営瓦工房

（梶原 2006「古代伊勢における官営瓦工房」『名古屋大学文学部研究論集』155

梶原 2006「古代伊賀・志摩における官営瓦工房」『三重大史学』6）

はじめに

先回までの例（西海道・吉備地域・東海地域）より：

国分寺造営においては、国司の主導により、在地の生産組織（もしくは、地方財政の範疇内での各国間の援助関係を含む）を活用する形で、国分寺瓦屋が成立。

国司が造営に関与した官衙系施設は、国分寺だけではない。

→国府・駅家・その他諸施設

その中で、おなじく国司が造営を管轄する施設ながらも、**国府と国分寺で瓦の様相が異なる例**が散見する（肥前・備前など）。

本講義では、国府と国分寺の瓦を比較検討することで、地方造瓦組織の成立期の様相をあきらかにしていきたい。

題材として、国府と国分寺、国分尼寺の瓦当文様がそれぞれ異なる、伊勢を扱う。また、併せて隣国である伊賀・志摩もとりあげる。

第1節 伊勢

伊勢国分寺の瓦

尼寺含め、軒丸瓦 19 型式、軒平瓦 13 型式に分類。

重圏文・重廓文軒瓦なども少量存在するものの、主体となるのは、

- ・外区珠文帯をもつ単弁八弁蓮華文軒丸瓦
- ・独特の中心飾りをもち、唐草が上下に枝状に展開する均整唐草文軒平瓦

出土地点や文様変遷の状況から、創建瓦として、

軒丸瓦Ⅱ A03 型式と軒平瓦Ⅱ B01 型式（金堂）

軒丸瓦Ⅱ A02 型式と軒平瓦Ⅱ B02 型式（講堂）

があげられ、そこからやや降る瓦として、

軒丸瓦Ⅱ A04 型式→軒丸瓦Ⅱ A05・軒平瓦Ⅱ B07 型式→

→軒丸瓦Ⅱ A06・軒平瓦Ⅱ B04 型式という年代観

製作技法的特徴：軒丸瓦の多くが積み上げ技法の横置型一本作りであるが、
最後出の軒丸瓦ⅡG01型式のみ、折り曲げ技法。

→平城京での変化と一致（神護景雲元（767）年以降）

伊勢国分尼寺の瓦

- ・外区珠文帯をもち彫りの浅い、単弁十二弁を中心とした軒丸瓦
- ・中心飾りの中央にV字状の意匠を配した均整唐草文軒平瓦が主体。

軒丸瓦ⅡC02・04型式（創建期）→ⅡC03・ⅡD01型式→ⅡB01型式

軒平瓦ⅡB05・06・09・10・11（創建期）→ⅡB08型式

製作技法的特徴：僧寺同様、積み上げ技法横置型一本作り。ただし胎土や細部調整
などは異なっており、工房は違っていたことが指摘【村居 2008】。

後出のⅡD01型式の瓦は、折り曲げ技法

→国分寺との技法的情報の共有。

国分寺系瓦と国分尼寺系瓦の国内波及：3系統の波及経路・分布域

- ・河曲郡：大鹿廃寺一尼寺系軒丸瓦ⅡC01型式と、僧寺系軒丸瓦ⅡB03型式
一志郡の上野廃寺・小野瓦窯でも同様のセット（折り曲げ技法？）
- ・飯野郡：ヒタキ廃寺・伊勢寺廃寺・野中垣内廃寺 安濃郡：浄土寺南遺跡
おもに補修瓦として、国分寺系の軒瓦がみられる。
- ・多気郡：逢鹿瀬廃寺・四神田廃寺
創建瓦として、国分尼寺系の軒丸瓦が使用されている。

伊勢国府の瓦

年代：均整唐草文軒平瓦ⅡA01型式と同範である平城京6719A型式の瓦の年代が、
「恭仁宮遷都以前の天平年間（729～740）」【山崎 1994】とされるなどから、
おおむね8世紀中頃の年代があたえられている。

軒丸瓦11型式、軒平瓦7型式が確認。

軒丸瓦はすべて重圏文。軒平瓦はⅡA01を除いてすべて二重廓文。

軒丸瓦は、二重圏文ⅠA01～09型式、二重圏文中心に珠点をもつⅠB01型式、
三重圏文ⅠC01型式。

瓦当径が小さめのⅠA01型式およびⅠA02型式が多数を占める。

ⅠA01・ⅠA02→ⅠA03（ここまで政庁地区中心）

→ⅠA04～09・ⅠB01（矢下地区中心）→ⅠC01の順に変遷

製作技法はほとんどが、積み上げ技法の横置型一本作り。

ⅠC01のみが、折り曲げ技法 → 国分二寺との技法変化の共通性

また、小型と大型2種類の瓦規格が存在

→難波宮軒廊出土の6012・6572D・F（小型瓦）と関連。国分寺にも。

伊勢国府系瓦の国内波及：天花寺廃寺・中谷遺跡・大角遺跡・切山瓦窯・鈴鹿関

天花寺廃寺を除き、関や駅家、頓宮など公的色彩の強い施設が多い【竹内 1993】

伊勢における造瓦体制の復原

- ① 国府・国分寺・国分尼寺のすべてにおいて、横置型一本作りという中央系の技法。成形台の形状や、軒丸瓦の大小作り分け、積み上げ技法から折り曲げ技法への変化など技術的な共通性も高く、工人集団間の密接な情報交換の結果と考えられる。
 - ② にもかかわらず、3者は文様的にはまったく異なっている。
 - ③ 3系統の瓦は、生産地自体も異なる：川原井瓦窯（尼寺）・八野瓦窯（国府・尼寺）
また、国内にそれぞれ異質な分布をもつ。
-
- ① より、各造瓦組織の管掌者は同一（国司）であることが知れる。
 - ② より、重圏文・重廓文という中央系の文様が、国分二寺であえて避けられている。
→中央との文様の遠近を超え、寺院の文様として蓮華文・唐草文が好適という意識。
 - ③ より：
 - ・ 国分寺と尼寺の瓦が、それぞれ異なる郡に波及
（文様波及の意味：工人の里帰り説・造営協力への報償説など）
→国分二寺造営において、郡ごとに造営の担当が割り振られた可能性。
→さらに言うなら、国分二寺の造瓦はおもに各郡によって賄われており、郡単位の造瓦管理が復原（武蔵など東国の文字瓦でも同様な様相）
 - ・ 国府系瓦については、官系施設を中心に、限定的な分布。
また国府からは、多種にわたる刻印瓦が出土→生産管理のための工人名
（恭仁宮・多賀城などと同様）
→国府の造瓦工人が、国衙などによって直接管理されていたことを表す？

第2節 伊賀

伊賀国分寺の瓦

- ・ 軒丸瓦：複弁四弁蓮華文。軟質の瓦。周辺諸寺には類例がない。
- ・ 軒平瓦：ⅠA型式：平城京6689型式に酷似する均整唐草文。硬質の焼成。
同範瓦が毛原廃寺・夏見廃寺・三田廃寺・鳳凰寺廃寺など、
伊賀国内のほとんどの寺院に広域に分布。
ⅡA型式：中心飾りが特徴的な均整唐草文軒平瓦。軟質の瓦。
複弁四弁軒丸瓦とセットになると考えられる。

軒平瓦ⅠA型式について

国府系瓦の一類型と位置付け、国分寺造営を契機に作られ、各寺に展開した。

↑

- ・出土量の問題（国分寺でわずか2点のみ。対応軒丸は国分寺のみ出土しない）
- ・生産地の問題（岩屋瓦窯という、他寺（大和毛原廃寺）所用瓦窯で生産）
- ・分布の問題（伊賀国内にとどまらず、伊勢地域にも波及）

⇒国分寺の主要瓦は、複弁四弁蓮華文軒丸瓦と、均整唐草文軒平瓦ⅡA型式。

均整唐草文ⅠA型式は、周辺他寺からもちこまれた「在地系瓦」

（「毛原廃寺造営に深く関与していた岩屋瓦窯が、廃絶する前に国分寺造営が開始され、一部の瓦が流用されたものであろうか」（森川桜男・山田猛氏）

・主要瓦の年代（国分寺の創建年代）

- ・平城京の軒平瓦6763型式が、中心飾りの形状などやや類似。

この瓦は平城京第Ⅳ期後半（神護景雲元（767）年～宝亀元（770）年）

- ・伊勢の御麻生園廃寺や広明町瓦窯、天花寺廃寺で同文瓦が出土。

御麻生園廃寺では東大寺式の軒丸瓦と共伴すると考えられ、

またこの東大寺式軒丸瓦は、西隆寺（神護景雲年間創建）の系譜をひく。

→伊賀国分寺の本格的な造営は、8世紀第3四半期の後ろのほう？

第3節 志摩

志摩国分寺の瓦

- ・軒丸瓦3型式、軒平瓦3型式と、比較的多種が知られている。

軒丸瓦は、外区に複線鋸歯文を施した単複弁四弁蓮華文軒丸瓦が2種および、

外区に重圏文を巡らせる複弁六弁または七弁蓮華文軒丸瓦。

最多型式は、伊勢西方廃寺・野中垣内廃寺と同範の複線鋸歯文縁複弁蓮華文。

伊勢におけるこの種の瓦では、文様的にもっとも後出。

軒平瓦は、偏行唐草文軒平瓦が2種と、三重弧文軒平瓦がみられた。

- ・胎土、焼成が2種に分かれる：多くの黒色砂礫を含むものと、そうでないもの。

伊勢系の瓦の多くも前者であり、それは伊勢においてはみられない特徴。

→志摩国内に範をもちこんで生産

→いわゆる「在地系瓦」ではなく、志摩国分寺瓦屋で生産された瓦

- ・国分寺造営において、隣国私寺から範を持ち込み瓦生産：稀有な例。肥前・壱岐

おわりに